2020年社会思想史学会研究大会自由論題報告　報告・質疑応答の概要

「マナーズ論としての宗教論：ホッブズとヒュームにおける哲学と歴史」

報告　上田悠久（茨城大学）

司会　古城毅（学習院大学）

【報告概要】

　ホッブズは『リヴァイアサン』中でマナーズについて議論しており、特に同書で宗教論が最初に登場するのもその中である。一方ヒュームは『イングランド史』の中で、ホッブズの宗教論が「懐疑の精神を欠いている」と指摘する一方、「その時代のマナーズを描写し」たことを評価していた。本報告では、なぜホッブズは宗教論をマナーズ論として論じ、ヒュームはホッブズの宗教論を取り上げつつマナーズ論を評価したのか、解き明かすことを目指した。まず両者の哲学的方法論や歴史叙述の哲学上の位置づけについての違いはあるものの、宗教史の検討に推論を持ち込む点において共通しており、ともに哲学と歴史の両面から宗教を論じていたことを明らかにした。次にマナーズ論において、人間の好奇心と恐怖が宗教を生むと述べ、神の存在証明の困難さや迷信の誕生を説明するホッブズの論法は、ヒュームとよく似ていることを指摘し、彼らが人間と人間社会に対する関心の一環としてマナーズ論としての宗教論を展開したこと、そしてホッブズに対するヒュームの「批判」の裏には、宗教を哲学と歴史の両面から論じたホッブズの知的企てに対する肯定的評価が存在すると示した。そして哲学と歴史の両輪による彼らの知的運動を「啓蒙」のプロジェクトと位置づけ、その思想史上の意義を強調した。

【質疑応答の概要】

　拙報告に対して二名の会員からコメントと質問を得た。一人目の会員からは、「マナーズ論としての宗教論」という定式化の妥当性に疑義が寄せられた。具体的には、報告者が議論の出発点とした、ヒュームが『イングランド史』においてホッブズのマナーズ論を評価したと解釈した部分は、哲学作品が受容され難いという一般論を述べる箇所であり、ホッブズを評価したとは読めないのではないか、またヒュームの「マナーズ」の用法は多様であり、宗教がマナーズに影響を与えたとする記述もあるので、ホッブズの一義的な用法と単純には比較できないのではないか（比較対象を明確化するためmannersを日本語に訳すべきである）、さらに両者が「人間本性との関連で宗教を論じた」とする先行研究の見方ではなぜ不適当で、「マナーズ論としての宗教論」が妥当なのか、を問われた。

　報告者は、以上の指摘に同意する一方、それでもなおホッブズとヒュームの宗教論を「マナーズ」の観点から比較することに意義があると応答した。『イングランド史』の記述はたしかにホッブズの「マナーズ」評価と断定できないものの、ホッブズの人間本性の描き方をヒュームが評価したのかという問題も存在する。当該記述でヒュームがホッブズに、哲学は評価されずマナーズをめぐる作品は評価された自己を投影している可能性もあり、単純にホッブズ批判とは読めない。またヒュームの多様な「マナーズ」用法を明らかにした上であれば、宗教がマナーズに影響を与えたとするヒュームと、マナーズが宗教に影響を与えたとするホッブズは比較可能である。そしてホッブズとヒュームが「人間本性との関連で宗教を論じた」のは重要な点だが、少なくともホッブズの議論としてはよく知られていることでもある。社会の形成発展における宗教の意義について二人を比較することで、ホッブズやヒュームそれぞれだけでなく、統治、社会、宗教のあり方をめぐる思想史についての理解も深まる、と応答した。

　もう一人の会員からも、立論の妥当性について質問があった。具体的には、『イングランド史』におけるヒュームによるホッブズの「マナーズ評価」に宗教論は含まれているのか、当該記述でヒュームがホッブズを「宗教の敵」と批判するのはホッブズの「宗教論」ではなく「哲学体系」ではないか、そして宗教論とマナーズというテーマで、他でもないヒュームとホッブズとを比較する意義や妥当性は何か、を問われた。

　報告者は、指摘についての説明不足や不十分さを認めつつも、研究の方向性それ自体は妥当であると応答した。たしかに『イングランド史』のホッブズ評に「マナーズ論としての宗教」が直接的に言及されてはおらず、むしろ宗教に関するホッブズの特定の記述ではなく、そうした議論を支える哲学体系の欠陥を指摘していたと言うべきであるが、ヒュームのホッブズ評を字義通り「攻撃」と捉えるのは不十分である。また歴史は学知scienceに劣後すると述べるホッブズが、宗教論を歴史的プロセスとして論じ、歴史と哲学を組み合わせて社会の形成、発展、維持における宗教の役割を考察したことをよりよく理解するためには、哲学作品と歴史作品の関係性が議論となっているヒュームと比較することが有益である、と応答した。